

応用数学 B

韓 承鎬

2018 年 10 月 15 日

目次

第 1 章	ベクトル	3
1.1	ベクトル	3
1.2	空間における微分	6
第 2 章	スカラー場とベクトル場	8
2.1	勾配ベクトル	8
2.2	ベクトル場の発散	10
2.3	ベクトル場の回転	12
2.4	演算子間の関係	13
第 3 章	空間上の積分	15
3.1	線積分	15

記号

α	定数
a	スカラー, 点
\mathbf{a}	ベクトル
C	線
S	面
S	有向平面
V	体積
f_x	ベクトル f の x 成分
$f(x)$	x を変数とするスカラー値関数
$\mathbf{f}(x)$	x を変数とするベクトル値関数
$f_x(x)$	x を変数とするベクトル値関数 $\mathbf{f}(x)$ の x 成分

第1章

ベクトル

1.1 ベクトル

スカラー，ベクトル

定義 1. 大きさのみを持つ量をスカラーといい，大きさと向きを持つ量をベクトルという．

表現 矢印を用いて，矢印の長さで大きさ，方向で向きを表す．

大きさ ベクトル a の大きさは絶対値記号を用いて $|a|$ で表す．

零ベクトル 大きさが 0 のベクトルを零ベクトルといい， 0 で表す．

相等 ベクトル a と b の大きさが等しく，向きが平行または同一直線上にあるとき， a と b は等しいという．数式で表すと

$$a = b \Leftrightarrow (|a| = |b|) \wedge (a \parallel b)$$

となるが，ここで “ \wedge ” 記号は “かつ” の “and” ロジックを表す．

1.1.1 ベクトルの成分

基本ベクトル

定義 2. x, y, z 軸の正の方向を向いた大きさが 1 のベクトル

$$e_x = (1, 0, 0), e_y = (0, 1, 0), e_z = (0, 0, 1)$$

はそれぞれ x, y, z 軸上の単位ベクトルとなり，これらを座標空間の基本ベクトルという．

ベクトルの成分

定義 3. 座標空間において，原点を始点とするベクトル a の終点を a としたとき， a を点 a の位置ベクトルという．点 a の座標が (a_x, a_y, a_z) であるとき， (a_x, a_y, a_z) を a の成分といい， $a = (a_x, a_y, a_z)$ と表す．ここで， a_x, a_y, a_z は順に a の x 成分， y 成分， z 成分という．

$\mathbf{a} = (a_x, a_y, a_z)$ のとき, 基本ベクトルを用いて

$$\mathbf{a} = a_x \mathbf{e}_x + a_y \mathbf{e}_y + a_z \mathbf{e}_z$$

で表せる.

1.1.2 ベクトルの和とスカラー積

ベクトルの和

定義 4. 2つのベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} が与えられたとき, \mathbf{a} の終点に \mathbf{b} の始点を合わせ, \mathbf{a} の始点から \mathbf{b} の終点に至るベクトルを $\mathbf{a} + \mathbf{b}$ と定義する.

【性質】

1. 交換則: $\mathbf{a} + \mathbf{b} = \mathbf{b} + \mathbf{a}$
2. 結合則: $(\mathbf{a} + \mathbf{b}) + \mathbf{c} = \mathbf{a} + (\mathbf{b} + \mathbf{c})$

ベクトルのスカラー積

定義 5. ベクトル \mathbf{a} と実数 α に対して, ベクトルのスカラー倍 $\alpha \mathbf{a}$ を次のように定義する.

- $\alpha > 0$ のときは, \mathbf{a} と同一直線上同じ向きで, 大きさ α 倍のベクトル
- $\alpha = 0$ のときは, 零ベクトル $\mathbf{0}$
- $\alpha < 0$ のときは, \mathbf{a} と同一直線上反対の向きで, 大きさ $|\alpha|$ 倍のベクトル

【性質】

1. $|\alpha \mathbf{a}| = |\alpha| |\mathbf{a}|$
2. $\alpha(\beta \mathbf{a}) = (\alpha\beta) \mathbf{a}$
3. $\alpha(\mathbf{a} + \mathbf{b}) = \alpha \mathbf{a} + \alpha \mathbf{b}$
4. $(\alpha + \beta) \mathbf{a} = \alpha \mathbf{a} + \beta \mathbf{a}$

和 (差), スカラー倍を成分で表すと

1. $(a_x, a_y, a_z) \pm (b_x, b_y, b_z) = (a_x \pm b_x, a_y \pm b_y, a_z \pm b_z)$
2. $\alpha(a_x, a_y, a_z) = (\alpha a_x, \alpha a_y, \alpha a_z)$

が成り立つ.

1.1.3 ベクトルの内積

内積

定義 6. $\mathbf{0}$ でない二つのベクトル \mathbf{a}, \mathbf{b} に対して, 内積 (スカラー積) を

$$\mathbf{a} \cdot \mathbf{b} = |\mathbf{a}| |\mathbf{b}| \cos \theta$$

と定める. ここで, θ は \mathbf{a} と \mathbf{b} の始点を一致させたときに二つのベクトルがなす角度である. 零ベクトルに対しては, $\mathbf{0} \cdot \mathbf{0} = \mathbf{0} \cdot \mathbf{a} = \mathbf{a} \cdot \mathbf{0} = 0$ と定める.

【性質】

1. $\mathbf{a} \cdot \mathbf{b} = \mathbf{b} \cdot \mathbf{a}$
2. $(\alpha \mathbf{a}) \cdot \mathbf{b} = \alpha (\mathbf{a} \cdot \mathbf{b}) = \mathbf{a} \cdot (\alpha \mathbf{b})$
3. $\mathbf{a} \cdot (\mathbf{b} + \mathbf{c}) = \mathbf{a} \cdot \mathbf{b} + \mathbf{a} \cdot \mathbf{c}$
4. 基本ベクトルに対して

$$e_x \cdot e_x = e_y \cdot e_y = e_z \cdot e_z = 1, \quad e_x \cdot e_y = e_y \cdot e_z = e_z \cdot e_x = 0$$

が成り立つ.

5. 座標空間では $\mathbf{a} = (a_x, a_y, a_z), \mathbf{b} = (b_x, b_y, b_z)$ のとき

$$\mathbf{a} \cdot \mathbf{b} = a_x b_x + a_y b_y + a_z b_z, \quad |\mathbf{a}| = \sqrt{a_x^2 + a_y^2 + a_z^2}$$

である.

1.1.4 ベクトルの外積

面積ベクトル

定義 7. 空間内の表と裏が指定された有向平面 S に対し, S に垂直で裏から表方向を向いた単位ベクトル \mathbf{n} を S の単位法線ベクトルという. S の平面上の閉曲線 C によって囲まれた領域 \mathbb{C} の面積を α とする. そのとき, ベクトル $\mathbf{c} = \alpha \mathbf{n}$ を領域 \mathbb{C} の面積ベクトルという.

点 p が閉曲線 C 上を \mathbb{C} の内部を左手に見る向きにまわるとき, 右ネジの進む方向が S の単位法線ベクトルと一致するならば, 閉曲線を正の向きに回るといふ.

外積

定義 8. 2つのベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} を両辺とする平行四辺形 \mathbb{S} に対し, この平面で垂直かつ \mathbf{a} から \mathbf{b} へ最短で右ねじを回すときねじが進む方向を表とすると, \mathbb{S} の面積ベクトルを \mathbf{a} と \mathbf{b} の外積と呼び $\mathbf{a} \times \mathbf{b}$ で表す. なお

$$\mathbf{0} \times \mathbf{0} = \mathbf{0}, \quad \mathbf{0} \times \mathbf{a} = \mathbf{0}$$

と定める.

$\mathbf{a} = (a_x, a_y, a_z)$, $\mathbf{b} = (b_x, b_y, b_z)$ のとき, 外積を成分で表せば

$$\mathbf{a} \times \mathbf{b} = \left(\begin{vmatrix} a_y & a_z \\ b_y & b_z \end{vmatrix}, \begin{vmatrix} a_z & a_x \\ b_z & b_x \end{vmatrix}, \begin{vmatrix} a_x & a_y \\ b_x & b_y \end{vmatrix} \right) = \begin{vmatrix} \mathbf{e}_x & \mathbf{e}_y & \mathbf{e}_z \\ a_x & a_y & a_z \\ b_x & b_y & b_z \end{vmatrix}$$

となる.

外積については, 次の法則が成り立つ.

1. $\mathbf{a} \times \mathbf{b} = -\mathbf{b} \times \mathbf{a}$
2. $|\mathbf{a} \times \mathbf{b}| = |\mathbf{a}||\mathbf{b}|\sin\theta$
3. $\alpha\mathbf{a} \times \mathbf{b} = \mathbf{a} \times \alpha\mathbf{b} = \alpha(\mathbf{a} \times \mathbf{b})$
4. $\mathbf{a} \times (\mathbf{b} + \mathbf{c}) = \mathbf{a} \times \mathbf{b} + \mathbf{a} \times \mathbf{c}$, $(\mathbf{b} + \mathbf{c}) \times \mathbf{a} = \mathbf{b} \times \mathbf{a} + \mathbf{c} \times \mathbf{a}$
5. $\mathbf{a} \parallel \mathbf{b} \Leftrightarrow \mathbf{a} \times \mathbf{b} = \mathbf{0}$
6. 基本ベクトルに対して

$$\begin{aligned} \mathbf{e}_x \times \mathbf{e}_y &= \mathbf{e}_z, & \mathbf{e}_y \times \mathbf{e}_z &= \mathbf{e}_x, & \mathbf{e}_z \times \mathbf{e}_x &= \mathbf{e}_y \\ \mathbf{e}_x \times \mathbf{e}_x &= \mathbf{0}, & \mathbf{e}_y \times \mathbf{e}_y &= \mathbf{0}, & \mathbf{e}_z \times \mathbf{e}_z &= \mathbf{0} \end{aligned}$$

1.2 空間における微分

ベクトル値関数, 定ベクトル

定義 9. ベクトル \mathbf{a} の成分が, 変数 u の関数

$$\mathbf{a} = (a_x(u), a_y(u), a_z(u))$$

であるとき, \mathbf{a} を $\mathbf{a}(u)$ と表し, u のベクトル値関数という. 変数に依存しないベクトルは定ベクトルという.

極限ベクトル, 連続

定義 10. ベクトル値関数 $\mathbf{a}(u) = (a_x(u), a_y(u), a_z(u))$ に対して, 定ベクトル α が存在し

$$\lim_{u \rightarrow u_0} a_x(u) \rightarrow \alpha_x, \quad \lim_{u \rightarrow u_0} a_y(u) \rightarrow \alpha_y, \quad \lim_{u \rightarrow u_0} a_z(u) \rightarrow \alpha_z$$

であれば α を $u \rightarrow u_0$ のときの極限ベクトルといい

$$\lim_{u \rightarrow u_0} \mathbf{a}(u) = \alpha$$

と表す. また, $\lim_{u \rightarrow u_0} \mathbf{a}(u) = \mathbf{a}(u_0)$ のとき, $\mathbf{a}(u)$ は u_0 で連続であるといい, 成分の導関数 $\frac{da_x(u)}{du}$, $\frac{da_y(u)}{du}$, $\frac{da_z(u)}{du}$ が存在するとき, ベクトル値関数

$$\frac{d\mathbf{a}(u)}{du} = \left(\frac{da_x(u)}{du}, \frac{da_y(u)}{du}, \frac{da_z(u)}{du} \right)$$

を $\mathbf{a}(u)$ の導関数という.

【性質】

1. $\frac{d\mathbf{c}}{du} = \mathbf{0}$
2. $\frac{d[\mathbf{a}(u) + \mathbf{b}(u)]}{du} = \frac{d\mathbf{a}(u)}{du} + \frac{d\mathbf{b}(u)}{du}$
3. $\frac{d[\alpha\mathbf{a}(u)]}{du} = \alpha \frac{d\mathbf{a}(u)}{du}$
4. $\frac{d[\mathbf{c} \cdot \mathbf{a}(u)]}{du} = \mathbf{c} \cdot \frac{d\mathbf{a}(u)}{du}$
5. $\frac{d[\mathbf{a}(u) \cdot \mathbf{b}(u)]}{du} = \frac{d\mathbf{a}(u)}{du} \cdot \mathbf{b}(u) + \mathbf{a}(u) \cdot \frac{d\mathbf{b}(u)}{du}$
6. $\frac{d[\mathbf{a}(u) \times \mathbf{b}(u)]}{du} = \frac{d\mathbf{a}(u)}{du} \times \mathbf{b}(u) + \mathbf{a}(u) \times \frac{d\mathbf{b}(u)}{du}$

演習問題

1. ベクトル $\mathbf{a} = (-1, 0, 7)$ と $\mathbf{b} = (-4, 5, 3)$ がなす角 θ を求めよ.
2. ベクトル $\mathbf{a} = (a_x, a_y, 0)$ と $\mathbf{b} = (0, b_y, b_z)$ の外積を計算せよ.
3. $\frac{d[\mathbf{a}(u) \times \mathbf{b}(u)]}{du} = \frac{d\mathbf{a}(u)}{du} \times \mathbf{b}(u) + \mathbf{a}(u) \times \frac{d\mathbf{b}(u)}{du}$ を証明せよ.

第2章

スカラー場とベクトル場

スカラー場，ベクトル場

定義 11. 平面または空間の領域 \mathcal{V} において， \mathcal{V} 内の各点 p にスカラー値 $f(p)$ が対応付けられているとき， \mathcal{V} をスカラー場といい，ベクトル値 $f(p)$ が対応付けられているとき， \mathcal{V} をベクトル場という．

- スカラー場の例：気温，気圧，温度，人口密度
- ベクトル場の例：海流，電場，磁場

2.1 勾配ベクトル

勾配ベクトル

定義 12. スカラー場 $f(x, y, z)$ に対して，偏導関数を成分にもつベクトル

$$\nabla f = \left(\frac{\partial f}{\partial x}, \frac{\partial f}{\partial y}, \frac{\partial f}{\partial z} \right)$$

をスカラー場 $f(x, y, z)$ の勾配ベクトルという．ここで，偏導関数をつくる作用 $\nabla = \left(\frac{\partial}{\partial x}, \frac{\partial}{\partial y}, \frac{\partial}{\partial z} \right)$ は，ナブラと呼び，ハミルトンの演算子という．

勾配ベクトルはグラディエントとも呼ばれ，スカラー場 f の勾配ベクトルは $\text{grad } f$ とも表す．

例 1. スカラー場

$$f(x, y, z) = \frac{1}{\sqrt{x^2 + y^2 + z^2}}$$

の勾配を計算せよ．

【回答】

$$\frac{\partial f}{\partial x} = -\frac{1}{2}(x^2 + y^2 + z^2)^{-\frac{3}{2}} 2x = -(x^2 + y^2 + z^2)^{-\frac{3}{2}} x$$

同様に

$$\begin{aligned}\frac{\partial f}{\partial y} &= -(x^2 + y^2 + z^2)^{-\frac{3}{2}} y \\ \frac{\partial f}{\partial z} &= -(x^2 + y^2 + z^2)^{-\frac{3}{2}} z\end{aligned}$$

より

$$\nabla f = -(x^2 + y^2 + z^2)^{-\frac{3}{2}} (x, y, z)$$

である。また、 $\mathbf{r} = (x, y, z) = xe_x + ye_y + ze_z$ 、 $|\mathbf{r}| = \sqrt{x^2 + y^2 + z^2} = r$ とおくと、 $\nabla f = -\frac{\mathbf{r}}{r^3}$ と書ける。

【性質】

スカラー場 $f(x, y, z)$ および $g(x, y, z)$ に対して、演算子 ∇ は次の計算規則が成り立つ。

1. $\nabla(\alpha f + \beta g) = \alpha \nabla f + \beta \nabla g$ α, β は定数
2. $\nabla(fg) = (\nabla f)g + f(\nabla g)$
3. $\nabla\left(\frac{f}{g}\right) = \frac{(\nabla f)g - f(\nabla g)}{g^2}$
4. $\nabla(h(f)) = \frac{d[h(f)]}{df} \nabla f$ h は f のスカラー値関数

2.1.1 勾配の意味

方向微分係数

定義 13. スカラー場 $f(x, y, z)$ において、点 (x_0, y_0, z_0) を通る単位ベクトル $\mathbf{u} = (u_x, u_y, u_z)$ を定め、その方向での傾斜

$$c(x_0, y_0, z_0) = \lim_{\Delta \rightarrow 0} \frac{f(x_0 + \Delta u_x, y_0 + \Delta u_y, z_0 + \Delta u_z) - f(x_0, y_0, z_0)}{\Delta}$$

をスカラー場 $f(x, y, z)$ の点 (x_0, y_0, z_0) における \mathbf{u} 方向への方向微分係数という。

スカラー場 $f(x, y, z)$ にある同位面 $f(x, y, z) = \alpha$ 上の点において、同位面上のベクトル \mathbf{u} を定め、方向微分係数を求めると、右辺は定数であるので

$$\frac{df}{du} = \frac{\partial f}{\partial x} \frac{dx}{du} + \frac{\partial f}{\partial y} \frac{dy}{du} + \frac{\partial f}{\partial z} \frac{dz}{du} = 0 \Leftrightarrow \nabla f \cdot \left(\frac{dx}{du}, \frac{dy}{du}, \frac{dz}{du} \right) = 0$$

となる。ここで $\left(\frac{dx}{du}, \frac{dy}{du}, \frac{dz}{du} \right)$ は微分点における接線の方向ベクトルであるから

$$\nabla f \cdot \mathbf{u} = 0$$

となり, $\nabla f \perp \mathbf{u}$ である.

∇f は接線に垂直な法線ベクトルとなり, スカラー場 $f(x, y, z)$ がもっとも増加する向きである. 単位法線ベクトルを \mathbf{n} とすると

$$\mathbf{n} = \pm \frac{\nabla f}{|\nabla f|}$$

で与えられる.

2.2 ベクトル場の発散

発散

定義 14. ベクトル場 $\mathbf{f}(x, y, z) = (f_x(x, y, z), f_y(x, y, z), f_z(x, y, z))$ に対して, スカラー値関数

$$\nabla \cdot \mathbf{f} = \frac{\partial f_x}{\partial x} + \frac{\partial f_y}{\partial y} + \frac{\partial f_z}{\partial z}$$

をベクトル場 $\mathbf{f}(x, y, z)$ の発散という.

ベクトル場 $\mathbf{f}(x, y, z)$ の発散はダイバージェンスといい, $\operatorname{div} \mathbf{f}$ で表すこともある. 平面ベクトル場 $\mathbf{f}(x, y) = (f_x(x, y), f_y(x, y))$ においては

$$\nabla \cdot \mathbf{f} = \frac{\partial f_x}{\partial x} + \frac{\partial f_y}{\partial y}$$

である.

例 2. ベクトル場 $\mathbf{f}(x, y, z) = \frac{xyz}{6}(x, y, z)$ の発散を計算せよ.

【回答】

発散の定義より

$$\begin{aligned} \nabla \cdot \mathbf{f} &= \frac{\partial}{\partial x} \left(\frac{x^2yz}{6} \right) + \frac{\partial}{\partial y} \left(\frac{xy^2z}{6} \right) + \frac{\partial}{\partial z} \left(\frac{xyz^2}{6} \right) \\ &= \frac{xyz}{3} + \frac{xyz}{3} + \frac{xyz}{3} \\ &= xyz \end{aligned}$$

勾配がスカラー場からベクトル場への演算であるに対し, 発散はベクトル場からスカラー場への演算である. その故にスカラー場 $f(x, y, z) = \frac{xyz}{6}(x + y + z)$ が与えられたとき, $\mathbf{f}(x, y, z)$ の勾配は

$$\begin{aligned} \nabla f &= \left(\frac{\partial}{\partial x} \left(\frac{x^2yz}{6} \right), \frac{\partial}{\partial y} \left(\frac{xy^2z}{6} \right), \frac{\partial}{\partial z} \left(\frac{xyz^2}{6} \right) \right) \\ &= \left(\frac{xyz}{3}, \frac{xyz}{3}, \frac{xyz}{3} \right) \end{aligned}$$

となる.

【性質】

1. $\nabla \cdot (\alpha \mathbf{f} + \beta \mathbf{g}) = \alpha \nabla \cdot \mathbf{f} + \beta \nabla \cdot \mathbf{g}$ (α, β は定数)
2. スカラー値関数 $g(x, y, z)$ に対して

$$\nabla \cdot (g\mathbf{f}) = \nabla g \cdot \mathbf{f} + g \nabla \cdot \mathbf{f}$$

2.2.1 発散の意味

平面的ベクトル場 $\mathbf{f}(x, y, z)$ で示される熱の流れのベクトル場があるとする。1辺の長さが $\Delta x, \Delta y$ の長方形をつくると、 Δy の辺から入る熱量は $f_x \Delta y$ であり、 Δx の辺から出る熱量は $f_y \Delta x$ である。よって y 軸方向の熱量の出入りは

$$[f_x(x + \Delta x, y) - f_x(x, y)] \Delta y \approx \frac{\partial f_x}{\partial x} \Delta x \Delta y$$

である。同様に y 軸方向には $\frac{\partial f_y}{\partial y} \Delta x \Delta y$ だけ出入りがあるので、単位面積当たりの熱量の出入りが $\nabla \cdot \mathbf{f}$ となる。

2.2.2 ラプラシアン

ラプラシアン

定義 15. 演算子

$$\nabla^2 = \frac{\partial^2}{\partial x^2} + \frac{\partial^2}{\partial y^2} + \frac{\partial^2}{\partial z^2}$$

をラプラシアンもしくはラプラス演算子と呼ぶ。

スカラー場 $f(x, y, z)$ が与えられたとき、 $f(x, y, z)$ の勾配の発散を求めると

$$\begin{aligned} \nabla \cdot (\nabla f) &= \nabla \cdot \left(\frac{\partial f}{\partial x}, \frac{\partial f}{\partial y}, \frac{\partial f}{\partial z} \right) \\ &= \frac{\partial^2 f}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 f}{\partial y^2} + \frac{\partial^2 f}{\partial z^2} \\ &= \left(\frac{\partial^2}{\partial x^2} + \frac{\partial^2}{\partial y^2} + \frac{\partial^2}{\partial z^2} \right) f \\ &= \nabla^2 f \end{aligned}$$

で表す。

2.3 ベクトル場の回転

回転

定義 16. ベクトル場 $f(x, y, z) = (f_x(x, y, z), f_y(x, y, z), f_z(x, y, z))$ に対して

$$\nabla \times f := \left(\frac{\partial f_z}{\partial y} - \frac{\partial f_y}{\partial z}, \frac{\partial f_x}{\partial z} - \frac{\partial f_z}{\partial x}, \frac{\partial f_y}{\partial x} - \frac{\partial f_x}{\partial y} \right)$$

これをベクトル場 $f(x, y, z)$ の回転という.

回転はローテーションもしくはカールと呼ぶこともあり, それぞれ $\text{rot } f$ もしくは $\text{curl } f$ で表す.

空間の基本ベクトルを e_x, e_y, e_z とすると回転は

$$\nabla \times f = \begin{vmatrix} e_x & e_y & e_z \\ \frac{\partial}{\partial x} & \frac{\partial}{\partial y} & \frac{\partial}{\partial z} \\ f_x & f_y & f_z \end{vmatrix}$$

で表せる.

例 3. ベクトル場 $f(x, y, z) = \frac{xyz}{6}(x, y, z)$ の回転を計算せよ.

【回答】

定義より

$$\begin{aligned} \nabla \times f &= \begin{vmatrix} e_x & e_y & e_z \\ \frac{\partial}{\partial x} & \frac{\partial}{\partial y} & \frac{\partial}{\partial z} \\ \frac{x^2yz}{6} & \frac{xy^2z}{6} & \frac{xyz^2}{6} \end{vmatrix} \\ &= \left(\frac{\partial}{\partial y} \left(\frac{xyz^2}{6} \right) - \frac{\partial}{\partial z} \left(\frac{xy^2z}{6} \right), \frac{\partial}{\partial z} \left(\frac{x^2yz}{6} \right) - \frac{\partial}{\partial x} \left(\frac{xyz^2}{6} \right), \frac{\partial}{\partial x} \left(\frac{xy^2z}{6} \right) - \frac{\partial}{\partial y} \left(\frac{x^2yz}{6} \right) \right) \\ &= \left(\frac{x(z^2 - y^2)}{6}, \frac{y(x^2 - z^2)}{6}, \frac{z(y^2 - x^2)}{6} \right) \end{aligned}$$

【性質】

回転について次の性質が成り立つ.

1. $\nabla \times (\alpha f + \beta g) = \alpha \nabla \times f + \beta \nabla \times g$
2. スカラー場 $f(x, y, z)$ とベクトル場 $g(x, y, z)$ に対し

$$\nabla \times (fg) = \nabla f \times g + f(\nabla \times g)$$

2.3.1 回転の意味

回転はベクトル場での渦巻きの流速ベクトルを表す。図 2.1 で示したように、空間のベクトル場

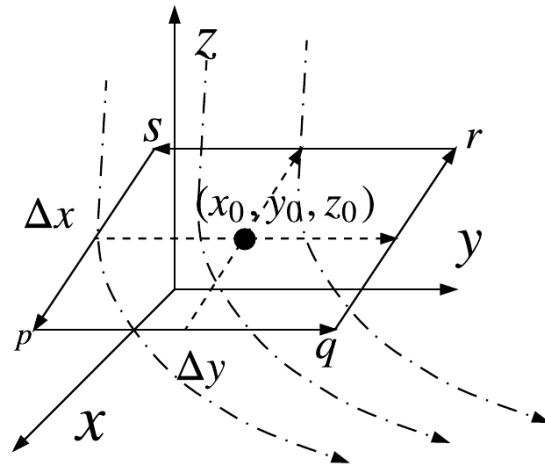


図 2.1 長方形渦の大きさ

$f(x, y, z)$ で法線ベクトルが z 軸の正の方向と一致する有向平面において、中心の座標が (x_0, y_0, z_0) で、 x 軸と y 軸で長さがそれぞれ Δx と Δy となる長方形 C があるとすると、この長方形 C での渦の大きさは

$$\begin{aligned}
 & f_y(x_0 + \Delta x/2, y_0, z_0)\Delta y - f_x(x_0, y_0 + \Delta y/2, z_0)\Delta x \\
 & - f_y(x_0 - \Delta x/2, y_0, z_0)\Delta y + f_x(x_0, y_0 - \Delta y/2, z_0)\Delta x \\
 = & (f_y(x_0 + \Delta x/2, y_0, z_0) - f_y(x_0 - \Delta x/2, y_0, z_0))\Delta y \\
 & - (f_x(x_0, y_0 + \Delta y/2, z_0) - f_x(x_0, y_0 - \Delta y/2, z_0))\Delta x \\
 = & \left(\frac{f_y(x_0 + \Delta x/2, y_0, z_0) - f_y(x_0 - \Delta x/2, y_0, z_0)}{\Delta x} \right) \Delta x \Delta y \\
 & - \left(\frac{f_x(x_0, y_0 + \Delta y/2, z_0) - f_x(x_0, y_0 - \Delta y/2, z_0)}{\Delta y} \right) \Delta x \Delta y \\
 \approx & \left(\frac{\partial f_y}{\partial x} - \frac{\partial f_x}{\partial y} \right) \Delta x \Delta y \\
 = & (\nabla \times \mathbf{f})_z \Delta x \Delta y
 \end{aligned}$$

なお、符号が負になる項は $f_x > 0, f_y > 0$ となる位置で、 C 上の渦の方向と f_x もしくは f_y の方向が反対であるためである。

2.4 演算子間の関係

勾配, 発散, 回転とベクトルの内積, 外積の間には次の等式が成り立つ。

1. $\nabla \times (f\mathbf{g}) = f(\nabla \times \mathbf{g}) + (\nabla f) \times \mathbf{g}$
2. $\nabla \times (\nabla \times \mathbf{f}) = \nabla(\nabla \cdot \mathbf{f}) - \nabla^2 \mathbf{f}$

3. $\nabla \cdot (fg) = f\nabla \cdot g + (\nabla f) \cdot g$
4. $\nabla(\mathbf{f} \cdot \mathbf{g}) = (\mathbf{f} \cdot \nabla)\mathbf{g} + (\mathbf{g} \cdot \nabla)\mathbf{f} + \mathbf{g} \times (\nabla \times \mathbf{f}) + \mathbf{f} \times (\nabla \times \mathbf{g})$
5. $\nabla \cdot (\mathbf{f} \times \mathbf{g}) = (\nabla \times \mathbf{f}) \cdot \mathbf{g} - \mathbf{f} \cdot (\nabla \times \mathbf{g})$
6. $\nabla \times (\mathbf{f} \times \mathbf{g}) = (\nabla \cdot \mathbf{g})\mathbf{f} - (\nabla \cdot \mathbf{f})\mathbf{g} + (\mathbf{g} \cdot \nabla)\mathbf{f} - (\mathbf{f} \cdot \nabla)\mathbf{g}$

演習問題

1. ベクトル場 $\mathbf{r}(x, y, z) = (x, y, z)$ に対して, $r = |\mathbf{r}| = \sqrt{x^2 + y^2 + z^2} \neq 0$ とおき, 次の値を $r, r, f(r), \frac{d[f(r)]}{dr}$ および $\frac{d^2[f(r)]}{dr^2}$ を用いて表わせよ.
 - (a) $\nabla f(r)$
 - (b) $\nabla \cdot [f(r)\mathbf{r}]$
 - (c) $\nabla^2 f(r)$
2. スカラー場 $f(x, y, z) = 2xy^2 - x^3z^2$ に対して, $\nabla \times (\nabla f)$ を求めよ.
3. スカラー場 $f(x, y, z)$ と $g(x, y, z)$ に対して, $\nabla \cdot (\nabla f \times \nabla g) = 0$ を証明せよ.

第3章

空間上の積分

3.1 線積分

空間曲線

定義 17. 空間上の点 c の位置ベクトルが変数 u の関数として

$$\mathbf{c}(u) = (c_x(u), c_y(u), c_z(u)) \quad (3.1)$$

であるとき, 変数 u の変化区間 $a \leq u \leq b$ での c の軌跡は

$$C : (\mathbf{c}(u))_{u=a}^b = (c_x(u), c_y(u), c_z(u))_{u=a}^b$$

空間曲線となり, 式 (3.1) を空間曲線の方程式という.

接ベクトル 空間曲線 C の接ベクトルは

$$\lim_{\Delta u \rightarrow 0} \frac{\Delta C}{\Delta u} = \lim_{\Delta u \rightarrow 0} \frac{\mathbf{c}(u + \Delta u) - \mathbf{c}(u)}{\Delta u} = \frac{d\mathbf{c}(u)}{du} = \left(\frac{dc_x(u)}{du}, \frac{dc_y(u)}{du}, \frac{dc_z(u)}{du} \right) \quad (3.2)$$

で与えられる.

弧長 空間曲線 C の微小な接ベクトル $d\mathbf{c}$ の長さ dC は

$$dC = |d\mathbf{c}| = \left| \frac{d\mathbf{c}}{du} du \right| = \left| \frac{d\mathbf{c}}{du} \right| du \quad (3.3)$$

となるので, $a \leq u \leq b$ で変化するときの弧長は

$$\int_C dC = \int_C |d\mathbf{c}| = \int_a^b \left| \frac{d\mathbf{c}}{du} \right| du$$

で与えられる.

線積分

定義 18. 空間のスカラー場 $f(x, y, z)$ において, 空間曲線 $C : (c(u))_{u=a}^b$ が与えられたとき

$$\begin{aligned} & \int_C f(c_x, c_y, c_z) dC \\ &= \int_C f(\mathbf{c}) |d\mathbf{c}| = \int_a^b f(\mathbf{c}) \left| \frac{d\mathbf{c}}{du} \right| du \\ &= \int_a^b f(c_x, c_y, c_z) \sqrt{\left(\frac{dc_x}{du}\right)^2 + \left(\frac{dc_y}{du}\right)^2 + \left(\frac{dc_z}{du}\right)^2} du \end{aligned}$$

を曲線 C に沿っての f の線積分とよぶ.

例 4. $f(x, y, z) = x^2yz$, $C : \left(u, \frac{u^2}{2}, \frac{u^3}{6}\right)_{u=0}^1$ とすると

$$\sqrt{\left(\frac{dc_x}{du}\right)^2 + \left(\frac{dc_y}{du}\right)^2 + \left(\frac{dc_z}{du}\right)^2} = \sqrt{1^2 + u^2 + \left(\frac{u^2}{2}\right)^2} = \frac{u^2 + 2}{2}$$

より

$$\int_C f dC = \int_0^1 \frac{u^7}{12} \cdot \frac{u^2 + 2}{2} du = \frac{7}{480}$$

である.

3.1.1 ベクトル場の接線線積分

接線線積分

定義 19. ベクトル場 $\mathbf{f}(x, y, z) = (f_x(x, y, z), f_y(x, y, z), f_z(x, y, z))$ において, 空間曲線 $C : (c(u))_{u=a}^b$ が与えられたとき, ベクトル $\mathbf{f}(x, y, z)$ と $d\mathbf{c}$ との内積の C に沿っての線積分

$$\int_C \mathbf{f} \cdot d\mathbf{c}$$

をベクトル場 \mathbf{f} の曲線 C に沿っての接線線積分と呼ぶ. 曲線 C 単位接線ベクトル

$$\mathbf{t} = \frac{d\mathbf{c}}{du}$$

を用いると, 接線線積分は

$$\int_C \mathbf{f} \cdot d\mathbf{c} = \int_C \mathbf{f} \cdot \mathbf{t} dC = \int_a^b \mathbf{f} \cdot \mathbf{t} du$$

で表せる.

例 5. $C : (a \cos \theta, a \sin \theta, b\theta)_{\theta=0}^{\pi}$ のとき, ベクトル場 $f(x, y, z) = (y, -z, x)$ の接線線積分を求めよ.

【回答】

$$\begin{cases} \frac{d(a \cos \theta)}{d\theta} = -a \sin \theta \\ \frac{d(a \sin \theta)}{d\theta} = a \cos \theta \\ \frac{d(b\theta)}{d\theta} = b \end{cases}$$

より

$$\begin{aligned} \int_C \mathbf{f} \cdot d\mathbf{c} &= \int_0^{\pi} (a \sin \theta, -b\theta, a \cos \theta) \cdot (-a \sin \theta, a \cos \theta, b) d\theta \\ &= \int_0^{\pi} [a \sin \theta \cdot (-a \sin \theta) - b\theta \cdot a \cos \theta + a \cos \theta \cdot b] d\theta \\ &= \int_0^{\pi} (-a^2 \sin^2 \theta - ab\theta \cos \theta + ab \cos \theta) d\theta \\ &= -\frac{\pi a^2}{2} + 2ab \end{aligned}$$

【性質】

スカラー値関数 $f(x, y, z)$ の勾配ベクトル ∇f の接線線積分は, 曲線 C の始点を a , 終点を b とすると

$$\begin{aligned} \int_C \nabla f \cdot d\mathbf{c} &= \int_C \left(\frac{\partial f}{\partial c_x}, \frac{\partial f}{\partial c_y}, \frac{\partial f}{\partial c_z} \right) \cdot d\mathbf{c} \\ &= \int_C \left(\frac{\partial f}{\partial c_x} dc_x + \frac{\partial f}{\partial c_y} dc_y + \frac{\partial f}{\partial c_z} dc_z \right) \\ &= \int_C df = [f(x, y, z)]_a^b \\ &= f(b_x, b_y, b_z) - f(a_x, a_y, a_z) \end{aligned}$$

となって, 2点 a, b にだけ関係し, 積分路に依存しない. とくに, 曲線 C が閉曲線 (始点と終点が一致する曲線) のとき, 線積分を \oint_C と表すことにすれば

$$\oint_C \nabla f \cdot d\mathbf{c} = 0$$

である.

例 6. 上の例 4 でのスカラー場 $f(x, y, z) = x^2yz$ と曲線 $C : \left(u, \frac{u^2}{2}, \frac{u^3}{6}\right)_{u=0}^1$ に対して, 線積分を

計算すると

$$\begin{aligned}\nabla f &= (2c_x c_y c_z, c_x^2 c_z, c_x^2 c_y) = \left(\frac{u^6}{6}, \frac{u^5}{6}, \frac{u^4}{2} \right) \\ d\mathbf{c} &= \left(1, u, \frac{u^2}{2} \right)\end{aligned}$$

より

$$\int_C \nabla f \cdot d\mathbf{c} = \int_0^1 \left(\frac{u^6}{6} + \frac{u^6}{6} + \frac{u^6}{4} \right) du = \int_0^1 \frac{7u^6}{12} du = \frac{1}{12}$$

が得られる。

一方, $\int_C \nabla f \cdot d\mathbf{c}$ が経路に依存しない性質を利用すると, $u = 0, 1$ に対応する曲線上の点の位置ベクトル $\mathbf{c}(0) = (0, 0, 0)$ 及び $\mathbf{c}(1) = \left(1, \frac{1}{2}, \frac{1}{6}\right)$ より

$$\int_C \nabla f \cdot d\mathbf{c} = f\left(1, \frac{1}{2}, \frac{1}{6}\right) - f(0, 0, 0) = \frac{1}{12}$$

と計算が簡単になる。

演習問題

1. スカラー場 $f(x, y, z) = x + y + z$ において, 円柱ラ線

$$C : (\alpha \cos u, \alpha \sin u, \beta u)_{u=0}^{\pi}$$

に沿った $f(x, y, z)$ の線積分を求めよ。

2. ベクトル場 $\mathbf{f}(x, y, z) = (yz, zx, xy)$ において, 原点 $o(0, 0, 0)$ から点 $a(1, 2, 2)$ までの直線に沿った接線線積分

$$\int_C \mathbf{f} \cdot d\mathbf{c}$$

を計算せよ。

演習問題回答例

第一章

1.

$$\cos \theta = \frac{\mathbf{a} \cdot \mathbf{b}}{|\mathbf{a}||\mathbf{b}|} = \frac{1}{2}$$

より, $\theta = \frac{\pi}{3}$ である.

2.

$$\mathbf{a} \times \mathbf{b} = \begin{vmatrix} \mathbf{e}_x & \mathbf{e}_y & \mathbf{e}_z \\ a_x & a_y & 0 \\ 0 & b_y & b_z \end{vmatrix} = (a_y b_z, -a_x b_z, a_x b_y)$$

3.

$$\begin{aligned} & \frac{d[\mathbf{a}(u) \times \mathbf{b}(u)]}{du} \\ &= \frac{d \left[\begin{vmatrix} \mathbf{e}_x & \mathbf{e}_y & \mathbf{e}_z \\ a_x(u) & a_y(u) & a_z(u) \\ b_x(u) & b_y(u) & b_z(u) \end{vmatrix} \right]}{du} \\ &= \left(\frac{d[a_y(u)b_z(u) - a_z(u)b_y(u)]}{du}, \frac{d[a_z(u)b_x(u) - a_x(u)b_z(u)]}{du}, \frac{d[a_x(u)b_y(u) - a_y(u)b_x(u)]}{du} \right) \\ &= \left(\frac{d[a_y(u)]}{du} b_z(u) - \frac{d[a_z(u)]}{du} b_y(u), \frac{d[a_z(u)]}{du} b_x(u) - \frac{d[a_x(u)]}{du} b_z(u), \frac{d[a_x(u)]}{du} b_y(u) - \frac{d[a_y(u)]}{du} b_x(u) \right) \\ &+ \left(a_y(u) \frac{d[b_z(u)]}{du} - a_z(u) \frac{d[b_y(u)]}{du}, a_z(u) \frac{d[b_x(u)]}{du} - a_x(u) \frac{d[b_z(u)]}{du}, a_x(u) \frac{d[b_y(u)]}{du} - a_y(u) \frac{d[b_x(u)]}{du} \right) \\ &= \begin{vmatrix} \mathbf{e}_x & \mathbf{e}_y & \mathbf{e}_z \\ \frac{d[a_x(u)]}{du} & \frac{d[a_y(u)]}{du} & \frac{d[a_z(u)]}{du} \\ b_x(u) & b_y(u) & b_z(u) \end{vmatrix} + \begin{vmatrix} \mathbf{e}_x & \mathbf{e}_y & \mathbf{e}_z \\ a_x(u) & a_y(u) & a_z(u) \\ \frac{d[b_x(u)]}{du} & \frac{d[b_y(u)]}{du} & \frac{d[b_z(u)]}{du} \end{vmatrix} \\ &= \frac{d[\mathbf{a}(u)]}{du} \times \mathbf{b}(u) + \mathbf{a}(u) \times \frac{d[\mathbf{b}(u)]}{du} \end{aligned}$$

第二章

1. (a)

$$\nabla f(r) = \left(\frac{\partial f(r)}{\partial x}, \frac{\partial f(r)}{\partial y}, \frac{\partial f(r)}{\partial z} \right)$$

ここで

$$\frac{\partial f(r)}{\partial x} = \frac{df(r)}{dr} \frac{\partial r}{\partial x}$$

であるが, $|r| = \sqrt{x^2 + y^2 + z^2}$ より

$$\frac{\partial r}{\partial x} = \frac{2x}{2\sqrt{x^2 + y^2 + z^2}} = \frac{x}{r}$$

となるので

$$\frac{\partial f(r)}{\partial x} = \frac{df(r)}{dr} \frac{x}{r}$$

である. 同様に

$$\begin{aligned} \frac{\partial f(r)}{\partial y} &= \frac{df(r)}{dr} \frac{y}{r} \\ \frac{\partial f(r)}{\partial z} &= \frac{df(r)}{dr} \frac{z}{r} \end{aligned}$$

が得られ

$$\nabla f(r) = \frac{df(r)}{r dr} (x, y, z) = \frac{df(r)}{dr} \frac{\mathbf{r}}{r}$$

である.

(b)

$$\nabla \cdot [f(r)\mathbf{r}] = \nabla f(r) \cdot \mathbf{r} + f(r)[\nabla \cdot \mathbf{r}]$$

上の 1a での結果より,

$$\nabla f(r) \cdot \mathbf{r} = \frac{df(r)}{dr} \frac{\mathbf{r}}{r} \cdot \mathbf{r} = \frac{r^2 df(r)}{r} = \frac{r df(r)}{dr}$$

である. 一方

$$\nabla \cdot \mathbf{r} = \left(\frac{dx}{dx}, \frac{dy}{dy}, \frac{dz}{dz} \right) = 3$$

となるので

$$\nabla \cdot [f(r)\mathbf{r}] = \frac{r df(r)}{dr} + 3f(r)$$

である.

(c)

$$\begin{aligned} \nabla^2 f(r) &= \nabla \cdot [\nabla f(r)] = \nabla \cdot \frac{df(r)}{r dr} \mathbf{r} \\ &= \nabla \frac{df(r)}{r dr} \cdot \mathbf{r} + \frac{df(r)}{r dr} (\nabla \cdot \mathbf{r}) \\ &= \nabla \frac{df(r)}{r dr} \cdot \mathbf{r} + \frac{3df(r)}{r dr} \end{aligned}$$

上の式の第一項で

$$\nabla \frac{df(r)}{r dr} = \left(\frac{\partial \frac{df(r)}{r dr}}{\partial x}, \frac{\partial \frac{df(r)}{r dr}}{\partial y}, \frac{\partial \frac{df(r)}{r dr}}{\partial z} \right)$$

であるが

$$\frac{\partial \frac{df(r)}{rdr}}{\partial x} = \left(\frac{d^2 f(r)}{rdr^2} - \frac{df(r)}{r^2 dr} \right) = \left(\frac{d^2 f(r)}{dr^2} - \frac{df(r)}{rdr} \right) \frac{x}{r^2}$$

となる。従って

$$\nabla \frac{df(r)}{rdr} = \left(\frac{d^2 f(r)}{dr^2} - \frac{df(r)}{rdr} \right) \frac{\mathbf{r}}{r^2}$$

となり

$$\nabla^2 f(r) = \frac{d^2 f(r)}{dr^2} + \frac{2df(r)}{rdr}$$

である。

2.

$$\begin{aligned} \mathbf{h} &:= \nabla f \times \nabla g = \left(\frac{\partial f}{\partial x}, \frac{\partial f}{\partial y}, \frac{\partial f}{\partial z} \right) \times \left(\frac{\partial g}{\partial x}, \frac{\partial g}{\partial y}, \frac{\partial g}{\partial z} \right) \\ &= \left(\frac{\partial f}{\partial y} \frac{\partial g}{\partial z} - \frac{\partial f}{\partial z} \frac{\partial g}{\partial y}, \frac{\partial f}{\partial z} \frac{\partial g}{\partial x} - \frac{\partial f}{\partial x} \frac{\partial g}{\partial z}, \frac{\partial f}{\partial x} \frac{\partial g}{\partial y} - \frac{\partial f}{\partial y} \frac{\partial g}{\partial x} \right) \end{aligned}$$

ここで

$$\nabla \cdot \mathbf{h} = \frac{\partial h_x}{\partial x} + \frac{\partial h_y}{\partial y} + \frac{\partial h_z}{\partial z}$$

となるが

$$\begin{aligned} \frac{\partial h_x}{\partial x} &= \frac{\partial^2 f}{\partial x \partial y} \frac{\partial g}{\partial z} + \frac{\partial f}{\partial y} \frac{\partial^2 g}{\partial x \partial z} - \frac{\partial^2 f}{\partial x \partial z} \frac{\partial g}{\partial y} - \frac{\partial f}{\partial z} \frac{\partial^2 g}{\partial x \partial y} \\ \frac{\partial h_y}{\partial y} &= \frac{\partial^2 f}{\partial y \partial z} \frac{\partial g}{\partial x} + \frac{\partial f}{\partial z} \frac{\partial^2 g}{\partial x \partial y} - \frac{\partial^2 f}{\partial x \partial y} \frac{\partial g}{\partial z} - \frac{\partial f}{\partial x} \frac{\partial^2 g}{\partial y \partial z} \\ \frac{\partial h_z}{\partial z} &= \frac{\partial^2 f}{\partial x \partial z} \frac{\partial g}{\partial y} + \frac{\partial f}{\partial x} \frac{\partial^2 g}{\partial y \partial z} - \frac{\partial^2 f}{\partial y \partial z} \frac{\partial g}{\partial x} - \frac{\partial f}{\partial y} \frac{\partial^2 g}{\partial x \partial z} \end{aligned}$$

従って

$$\nabla \cdot (\nabla f \times \nabla g) = 0$$

である。